

2 事業実施の概要

本事業は、文化庁より公益社団法人日本芸能実演家団体協議会へ委託され、実施しました。委託内容は大きく、(1) 芸術団体や劇場等における実践的な研修の企画及び実施、(2) 実演芸術国際シンポジウムの開催、これらを実施するために必要な取組として「全国劇場・音楽堂等連携フォーラム」の3つの取組を実施しました。

なお、平成28年度は前年度3月に企画提案の公募が行われ、4月初旬に公益社団法人日本芸能実演家団体協議会へ委託が決定し、事業が開始しました。

1 国内専門家フェロシップ制度

新たな学びの場となる多様な実務研修と人的交流の機会を設けることで、能力向上とより強固な専門家ネットワーク構築を目的とした国内研修制度です。対象者の研修目的、研修計画に沿って、研修先や研修内容のマッチングを行います。

2 全国劇場・音楽堂等連携フォーラム

共同制作や巡回公演等の連携事業や専門人材の育成について、国内における事例紹介や、課題共有のための意見交換を行うフォーラムです。芸術団体、劇場・音楽堂等の相互の連携促進と、その基礎となるネットワークの形成・強化をねらいます。

3 実演芸術国際シンポジウム

実演芸術の担い手となる人材を育成し専門性を高めるとともに、これまでに各分野で個別に培われてきたネットワーク形成や国際的な協働の事例を、実演芸術全体の財産として課題を含めて共有し、ともに考えていくためのシンポジウムです。実演芸術活動を国際的に展開し、さらに活動を継続していくために、多様な実演芸術の専門家同士の情報交流の機会を生み出し、横断的なネットワークの構築を促すことを目指します。



「東京 2020 公認文化オリンピック」認証事業

1 国内専門家フェローシップ制度

音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の実演芸術分野で活動する制作者や舞台技術者等に対し、現職以外の芸術団体や文化施設等での1ヶ月から6ヶ月程度の実践的な研修の機会を提供する「国内専門家フェローシップ制度」を企画、実施しました。現職の現場だけでは得難い新たな知識や技術の習得を目的とし、多様な実務研修の場、人的交流の機会を提供することで、実務能力の向上と新たな人的ネットワークの構築を促し、「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」にも謳われている、制作者、技術者、運営者、実演家等、実演芸術に係る専門人材の育成をねらうものです。

▶ 公募、募集条件

【募集期間】

平成28年5月9日（月）～7月1日（金）

【対象者】

音楽、演劇、舞踊、演芸、伝統芸能等の実演芸術分野において、プロデューサー、アートマネジメント人材、舞台技術者等として活動する者で、次の条件を満たす者。

- ①日本国籍又は日本の永住資格を有すること
- ②平成28年5月1日時点で満20歳以上であること
- ③専門とする分野において芸術活動の実績があること
- ④研修修了後も芸術活動に継続して従事し、後進の育成にも貢献し得る者

【研修対象期間】

原則として平成28年9月～平成29年2月とし、この期間内に1ヶ月から6ヶ月程度の研修を行うこととしました。

【給付内容】

研修期間に応じて、研修者、研修派遣元、研修受け入れ先それぞれへ次の給付を行いました。

●研修者

- ①研修開始時及び研修終了時の移動費（航空賃及び有料特急運賃の実費）※遠隔地の場合のみ
- ②研修日当 研修期間中一日当たり5,000円

●研修派遣元

研修者が現所属団体に雇用されており、所属団体から研修派遣させる場合には、派遣元となる現所属団体に次の費用を給付しました。

- ①研修協力費 研修期間中一日当たり7,840円（月20日分を上限とする）

●研修受け入れ先

- ①研修指導料 研修期間中一日あたり5,000円（月20日分を上限とする）

【応募方法】

個人からの応募、団体（派遣元）からの応募のいずれかとし、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会への郵送または持ち込みによる受け付けとしました。なお、募集については、インターネット、DM案内、

メール案内等で告知をしました。

▶ 応募数と選考

選考方法は、一次選考（書類審査）、二次選考（面接）としました。二次選考では有識者による選考委員会を設置し、研修計画及び研修目的の具体性、研修後の波及効果等、書類と面接による総合的な評価を実施しました。

応募件数は9件、二次選考対象者が6名、選考を経て6名が内定しました。

▶ 研修先のマッチング

内定者の研修目的及び今後の活動計画を勘案した上で、研修者本人の希望をもとに、事務局による研修先のマッチングを行いました。本事業の趣旨、研修者の略歴及び研修目的、給付内容や保険等の研修受け入れに関する諸条件を説明し、調整を進めました。結果、下記表の通り、6名の研修が決定し、順次研修を開始しました。うち、5名は団体からの研修派遣でありました。

なお、マッチングを行った結果、条件の不一致や、選考委員からの推薦等を受けて、決定した研修受け入れ先が、申請時の本人の希望と異なるケースも含まれています。

※研修開始順

氏名	職域(分野)	研修派遣元(団体申請)	研修受け入れ団体	研修期間
井田 宗幸	舞台照明 (演劇)	株式会社劇団わらび座	株式会社アート・ステージライティング・グループ(ASG)	平成28年8月28日～ 平成28年9月30日
横山 恭子	制作 (舞踊)		特定非営利活動法人BEPPU PROJECT	平成28年9月1日～ 平成29年1月31日
佐藤 結	制作 (児童演劇)	有限会社人形劇団クラルテ	公益財団法人静岡県舞台芸術センター(SPAC)	平成28年12月12日～ 平成29年1月22日
畔柳 陽子	マネージャー (音楽)	一般社団法人ジャパン・シンフォニック・ウインズ/シエナ・ウインド・オーケストラ	公益財団法人東京交響楽団	平成28年12月26日～ 平成29年2月6日
山邊 千尋	舞台照明	一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団/帯広市民文化ホール	公益財団法人びわ湖ホール/滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール	平成29年1月6日～ 平成29年2月19日
萬福 倫子	制作 (演劇)	公益財団法人兵庫県芸術文化協会/兵庫県立芸術文化センター	公益財団法人せたがや文化財団/世田谷パブリックシアター	平成29年1月17日～ 平成29年3月20日

▶ 研修実施結果

研修者には、研修期間中の月次報告書、及び研修修了後の修了報告書の提出が義務付けられています。これにより、人材育成の実績として、各人の研修成果及び課題等の情報収集と蓄積を図ります。

平成28年度の6名は、音楽、演劇、児童演劇、舞踊と異なる分野で、制作、舞台照明とそれぞれ職域も活動実績も多岐にわたります。マッチングにより、芸術団体（個人含む）から芸術団体や民間団体への研修が3名、芸術団体から公設団体への研修が1名、公立劇場から公立劇場への研修が2名となりました。最長で6ヶ月の研修を可能としていましたが、結果として研修期間は3ヶ月未満が5名となりました。これは、マッチング及び研修受け入れ先の問題というよりも、募集期間と研修実施期間が同一年度内にあることによる時間的制約や、現職の業務上の都合によるところが大きいものです。

研修の内容については、研修者の研修目的及び職域等に合わせ、研修期間中に携わることが可能な事業等の「研修計画」を、あらかじめ研修受け入れ先が作成します。

1 応募理由・研修目的 2 研修内容 3 研修成果と課題 4 展望 (修了報告書より抜粋編集)

井田 宗幸 (株式会社劇団わらび座)

研修先：株式会社アート・ステージライティング・グループ (ASG)

平成28年8月28日～平成28年9月30日

- 1 舞台照明家として9年間、所属劇団のみで経験を重ねてきた。特にプランニングの経験値が乏しく、照明の理論や効果について外から直接学ぶ機会が少ないため、独学ではなく、他の現場で技術や知識を学び、幅広い見解を持ち帰りたいという目的で応募した。研修先となるASGは、劇団わらび座とともに舞台を創った経験から、その取り組み、あかりの素晴らしさに感動したこと、半世紀にわたり照明の第一線を担い、日本を代表する照明家を多数輩出している実績から第一希望とした。
- 2 オペラや2.5次元ミュージカル等、主に4つの作品のプランニングの現場に関わった。
- 3 当劇団で年4本ほどの新作の立ち上げのペースに比べると、稽古見から、プランニング、機材準備、仕込み、あかり合わせまで、プランを専門に扱うASGならではの頻度と手際の良さに驚かされた。当劇団ではまだ馴染みの薄いムービングライトや、昔ながらの照明方法、さらにLED電飾や映像（プロジェクションマッピング）といった新しい分野にも触れ、ステージに広がりを出すための空間造形の表現方法のいろはを学ぶ事が出来た。ひとつひとつのきっかけの大事さ、とっさの対応力、舞台を見るとはどういうことかを改めて考えさせられ、よりよい作品を目指す舞台人のストイックな姿勢と、厳しい現場でも支え合う気遣いを学ぶことができた。
- 4 研修で学んだことを当劇団で共有の財産にしていきたい。さらに経験と実績を重ね、当劇団内からの信頼を得て、大規模作品のプランニングに携われるまでに成長したい。

横山 恭子

研修先：特定非営利活動法人 BEPPU PROJECT

平成28年9月1日～平成29年1月31日

- 1 約10年間、福岡を拠点に舞台芸術の制作・コーディネート業務に従事してきた経験を踏まえ、地域の多様なステークホルダーと協働しながら芸術振興を行っているNPO法人BEPPU PROJECT (BP) が、どのように地域社会と関係づくりをし、事業を展開しているのか、またどのようにスタッフ間でビジョンや情報を共有し、育成をしているのか、その手法や考え方を学びたいと思い、BPでの研修を希望した。
- 2 「In Beppu」(別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の後継事業)や「Action!2」(障がい者アートに従事する当事者へスポットを当てた展示とイベント)等のプロジェクトの現場研修の他、定例会議や事業後の内部評価会議に参加するなど、日々の業務において団体経営や組織マネジメントを学んだ。
- 3 大分での成功例は、BP代表の山出氏をはじめ関係者が、自分たちのミッションに対する確固たる信念を持ち、「アート」という言葉の狭義の意味に囚われず、大胆かつ戦略的に事業を展開し、実績を残してきたことの現れである。揺るぎない信念と忍耐、変化を恐れない勇気と前進し続ける熱意。活動を続けていくうえで一番重要なことを、改めて肌で感じ、学び直せたことが今回の研修の何よりの収穫だと感じている。
- 4 ジャンルや領域を超えた協働は、これからますます求められると感じており、より大胆に領域をまたいだクリエイションや人材育成プログラムを企画していきたい。また、将来、福岡で地域密着型の芸術振興団体を設立することを念頭に、私自身のビジョンや問題意識をクリアにし、地域を知ること・芸術について考えを深めながら、粘り強く長期的に取り組んでいきたい。

佐藤 結（有限会社人形劇団クラルテ）

研修先：公益財団法人静岡県舞台芸術センター（SPAC）

平成28年12月12日～平成29年1月22日

- 1 演劇教育やアートマネジメントの素地がないまま劇団での経験を積み、制作者として約5年。子どもたちにとって初めての演劇との出会いが良いものになるよう制作者として力を発揮するためには何をすればよいのか、他団体での研修を通して、これまでと異なる視点や方法論を得たい。地域における劇場・劇団の在り方を学び、作品の創造過程において制作が果たす役割、現場との関わり方の事例を知りたいとの思いから応募に至った。
- 2 新作の稽古初日から一般公演初日までを研修全体のスケジュールとして設定。作品の制作過程をつぶさにみることができた。その他、劇場で行われる中高生鑑賞事業や一般公演でお客様をお迎えする際のオペレート、劇場外で行われるアウトリーチや市民との共同制作事業など多岐に渡る活動に同行した。
- 3 自分の抱える問題に対して、それを解決するための特效薬があるわけではないという当たり前のことを認識できた。制作部内での仕事の進め方や関わり方、他部署との連携、一人一人の振る舞いが劇団全体の雰囲気を作っていく。劇団全体の舵取り役が必要であり、全体の雰囲気は一人一人の人間が作るものだという意識の共有をすることで業務を円滑にし、キャリアに関係なく、それぞれのコンテクストをもとに意見交換を闊達に行える組織にすることが、作品の質にも大きく関わるのだという確信を得られたことに勇気づけられた。SPACでのやり方を、劇団の活動に見合った方法にどう工夫して取り入れるか、伝える手段としての話し言葉や文章に対する意識の向上が課題だと実感した。
- 4 劇団として、児童・青少年演劇を志す人のプラットフォームとしての役目を果たすとともに、社会からの要請や事情に左右されず、より良い作品を生み出していくための拠点として存在感を示すことができるよう、今回得た経験を活かしていきたい。

畔柳 陽子（一般社団法人ジャパン・シンフォニック・ウインズ／シエナ・ウインド・オーケストラ）

研修先：公益財団法人東京交響楽団

平成28年12月26日～平成29年2月6日

- 1 入社2年目で経験が浅く知識も少ないため、公演制作のノウハウ、自主公演における広報宣伝のプロセス、楽団員管理、長期スケジュールリングのノウハウ、マネージャーとしてのスキルアップを目指して研修を希望した。
- 2 リハーサル・公演日の立ち合い、自主公演での表回り、音楽事務所営業の立ち会い、事務作業等
- 3 約1ヶ月間で多くの公演に携わることができ、その都度多くの発見（1.マネージャーとしての考え方・振る舞いの変化。2.仕事の効率化。3.仕事へのこだわり）や学びがあった。東京交響楽団は連日リハーサルや公演を抱え、どれだけ効率のよい仕事をするかが重要であった。パーソナルマネージャーをはじめ、舞台監督や担当者の仕事を肌で感じ、目先の公演だけでなく、広い視野を持ち仕事をしているのが印象的であった。
- 4 弊社は2010年10月から東京都文京区と、2011年4月から学校法人尚美学園とそれぞれ事業提携を結び、2016年8月には上越教育大学・上越文化会館との3者間で事業提携をした。今後全国に活動を広げる一歩となるよう、今回得た知識や経験を活かし企画制作を行っていきたい。自主公演でのボランティアスタッフも検討を進めたいひとつである。また、研修期間中に全国のホール関係者・音楽事務所の方と会うことができた。この繋がりを大切に、今後関東圏だけでなく日本全体で芸術分野における更なる発展を目指すとともに、その役割を担っている一人だと自覚し活動していきたい。

山邊 千尋（一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団／帯広市民文化ホール）

研修先：公益財団法人びわ湖ホール 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

平成29年1月6日～平成29年2月19日

- 1 市民バレエや市民オペラなど、多くの市民が参加し、演出家・指揮者などプロの指導者やスタッフと一緒に一つの舞台を作り上げていく過程において、劇場の技術職員としてどのように関わっていくべきか、また、それに伴い舞台演出効果を高めるための更なる技法を学びたいと考え応募した。
- 2 自主事業での事業部と技術部の連携と進行、演出家・指揮者との関わり方、明かり作り時の対応の見学、貸館公演の管理対応（自主事業6件と関連講座、および貸館公演1件）。
- 3 自主事業の際には、舞台袖に事業部公演担当者と統括責任者が常駐し、舞台進行担当者や舞台監督と連携することで公演時のトラブルや状況判断がスムーズに行われていた。演出家立会いで明かり作りでは、変更点や追加などに素早く柔軟に対応できる知識と技術力が必要であることも実感した。また、安全への取り組みとして、文字だけでなく絵で表示してある注意喚起や立入禁止の掲示、舞台機構作動時の三角コーンやトラロープ、LEDチューブによるローピング等、見ただけですぐに分かる表示の重要性に気づいた。
- 4 まず自分が積極性を持って様々な方としっかりコミュニケーションをとり、知識・技術・表現方法を学ぶ事で、技能向上を目指していきたい。更に、自身が研修で得た知識等を用いて後進の指導にあたり、共に舞台を作り上げる事で、今後の舞台技術を担う新たな人材育成を行いたい。また、ホール利用者にむけた危険箇所に対する注意喚起表示をするなど、安全に使用できる環境の整備を目指す。最後に、自主事業としておこなう市民参加型のバレエやオペラ等の公演において、今回の研修で学んだ事業部や各セクションとの連携、技術や知識を活用し、劇場の職員として出演者とスタッフとの間に立ち、より良い舞台を作り上げられるよう努めたい。

萬福 倫子（公益財団法人兵庫県芸術文化協会／兵庫県立芸術文化センター）

研修先：公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター

平成29年1月17日～平成29年3月20日

- 1 大学でアートマネジメントを専攻し、兵庫県立芸術文化センターに勤務。事業部に配属されて4年目。当センターでは、年間300公演以上の自主事業を実施しているが、公演制作のノウハウを蓄積することが課題となっている。これまで多くの演劇公演に携わってはきたが、公演制作の一連の過程を地方劇場で体験することは難しい。制作者としての心得や対応、広報ノウハウや地域住民に愛される劇場づくりを学びたいと思い志望した。
- 2 世田谷パブリックシアター企画制作『炎 アンサンディ』において、立ち上げから本番までの公演制作として、スタッフ・キャストの稽古場対応及び舞台稽古、本番公演時の対応、更に取材対応、パンフレット作成等について経験することができた。一から創り上げる公演制作に携わることは初めてであり、稽古場にずっとついて仕事をするのも初めての経験であった。また、別の海外招聘公演では、字幕の作成や通訳を介してのやり取りなどのイレギュラーなことが多い中、国内団体による旅公演とは違う細かい配慮を学んだ。
- 3 稽古場の設えやケータリング等への細やかな気遣い、キャスト・スタッフへのスケジュール伝達の重要性、制作同士の細やかな情報共有等、現場を通して多くを体験した。制作者としての心得をプロデューサーの言葉から学ぶとともに、ずっと稽古場で仕事をしてキャストやスタッフと一緒に過ごすことで、信頼関係を築くことの大切さに気づいた。また、公演開始に当たり、地震時の対応についての説明等、ルールを決めて全関係者へアナウンスすることの重要性も実感した。
- 4 当センターでは今後、演劇の自主制作事業の充実を検討している。この経験を通して学んだことを他のスタッフにも共有し、事業展開に向けて取り組んでいきたい。長期的なビジョンとして、他の地域の公共ホールとの連携を図り、全国の劇場との共同制作事業を視野に入れた活動を、当センター発信で手掛けていきたい。